

第一章 序論

本論は、日本語のコソア¹の研究である。その目的は従来のコソアの文献から指示機能のあるコソア（現場指示と文脈指示におけるコソア）の統一的な説明を求める。つまり、基本義を追求することと指示機能のないコソアとの連続性をはっきりさせることである。本章では、主に研究の動機、範囲、構成と方法論について述べる。

1.1 研究の動機と目的

「指差す」あるいは「直接に対象を指示する」という機能を持つ「コソアド」を語頭に持つ一連の語彙²は従来、代名詞の下位分類³と見なされ指示代名詞と呼ばれていた。佐久間（1951）は代名詞をはじめ、連体詞、連用詞、副詞などの品詞で区別することが難しい理由で、この種の語彙を「コソアド」⁴（指示詞）という名称で一まとめにした。この中で、「ド」は不定指示詞であるゆえ、定称指示詞の「コソア」と区別される。

表 1：佐久間（1983：7）が定義する指示詞

	近称	中称	遠称	不定称
もの	コレ	ソレ	アレ	ドレ
方角	コチラ コッチ	ソチラ ソッチ	アチラ アッチ	ドチラ ドッチ
場所	ココ	ソコ	アソコ	ドコ
もの／人(卑)	コイツ	ソイツ	アイツ	ドイツ
性状	コンナ	ソンナ	アンナ	ドンナ
指定	コノ	ソノ	アノ	ドノ
容子	コー	ソー	アー	ドー

佐久間の功績の一つは、従来の指示代名詞という品詞の限界を超えて、事物

¹ 従来指示詞と呼ばれるのは「コソアド」であるが、その中の「ド」系語は不定指示詞である。具体的に何かを指しているのではなく、それにはっきりした縄張りを持っていない故、ここで「コソア」の機能と区別し、研究の対象外とする。

² 佐久間はこの種の単語の本質について、「もの」を「指す」のに限られるべきではないと見て、「もの・対象」をだけでなく、「こと、ことがら、事件、事象」をも指すことができ、さらに事の進行の経過、ものの存在の有様について指示することもできると考えている。

³ 代名詞の下位分類は人称代名詞と指示代名詞の二種類がある。

⁴ 佐久間（1951：13）は代名詞の在来の分け方をやめて、事物や状態を指し示す単語の一群として「コソアド」という名称で一まとめにして、「指示詞」・「指す語」とも言っているが、とにかく人を指す語彙である「人代名詞」と区別して取り上げている。

や情態を指し示す単語の一群として、「コソアド」あるいは、「指示詞」・「指す語」という斬新な名前呼び始めたことである。

しかし、「コソア」を接頭辞とする語彙は、指示機能を持つものだけではない。慣用表現（それはそれは、これはこれは…）、対定型句（あっちこっち、そうこうする…）、接続詞（それで、そこで…）、感動詞（こら、そら、あら／これ、それ、あれ）、文間に挟まれる穴埋め用の「この一、その一、あの一」、また呼び掛けの時に発した「あの一、すみません。」など、まったく指示機能が感じられないものもある。

それ故、コソアドと名づけられる一連の語彙の中に、少なくとも、三段階が存在すると思われる。

- (1) a. 指示機能を持つコソア 【コソアの基本機能】
- b. 指示機能の曖昧なコソア 【aとcの境目】
- c. 指示機能を持たないコソア 【指示機能がゼロに近い】

狭義の定義をすれば、「指示詞」と呼ぶことができるのは(1a)だけであろう。コソアを語頭に持つ語彙はすべて「指示機能」が存在するわけではないため、一まとめにして、指示詞と呼ぶのも問題があるのではないと思われる。

これまでのコソアの研究は現場指示と非現場指示における統一的な説明に関心が集まっていたが、指示対象を持たないコソアと、指示機能が曖昧なコソアの研究はまだ少ないようである。

指示機能が曖昧なコソアや指示機能を持たないコソアが何を「意味する」という疑問に対して、認知言語学の観点からコソアの解釈に役に立つと思われる。コソアには空間の指示から、時間へ、さらに具体的なものを指す場合から、抽象的な使い方へ意味を拡張していくプロセスが見られるからである。

指示代名詞の「これ・それ・あれ」はただ物事を指し示すのではなく、人・時間・場所なども指し示すことができる。

一時的感動を表す「これ・それ・あれ」やフィラーの「この(一)・その(一)・あの(一)」のような感動詞に至っては、指示性はすでに失われているが、同じ形式を持つ上で、プロトタイプのコソアとは無関係ではないと考えられる。

この研究を通して、従来の指示詞を考察し、コソアの意味拡張の観点から、指示機能のないコソア（接続詞と感動詞）の表現意図と基本義との連続性をはっきりさせたいと思う。

問題点は、具体的に以下の三つに絞ることができるであろう。

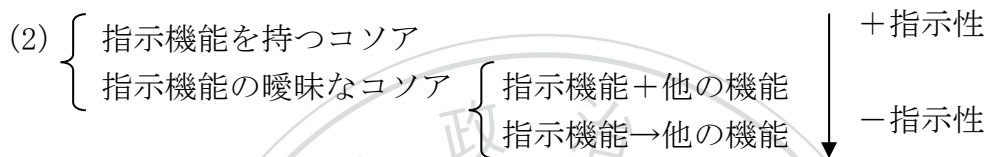
- ①指示機能を持つコソアの基本義は何か。
- ②指示対象がはっきりしていない場合や、指示対象が具体的に存在しない曖昧指示用法が「何」を意味するか。
- ③「指示機能を持つコソア」から「指示機能が曖昧なコソア」へどのように意味拡張してきたか。

1.2 研究方法と範囲

これまでの指示詞の研究における縄張り理論、共有知識仮説、談話管理理論、テキストの結束性についての問題点とその使い分けを認知言語学の意味拡張と記憶階層関係の観点から見て、統一的な説明を試みる。

また、コソアを冠する一連の語彙で、これまで指示詞の範疇に入れられていなかったものをコソアの拡張事例と見て、プロトタイプのコソアとの連続性を分析する。そして、これらはまったく指示機能を持たないとは判断しにくい故、

(1) を以下のように修正したい。



まず、本稿で言う指示機能を持つコソアは大まかに、佐久間 (1951) が認定した指示詞を指す。そして、指示機能が曖昧なコソアは主に「コソアを含む接続詞」と「コソアを含む感動詞」の二つに分けることにする。

「コソアを含む接続詞」は指示機能が徐々に失われていく一方、文脈接続機能が生まれる接続詞や指示複合語⁵などである。その特徴は、指示機能が少ないか、弱くなっていることである。「コソアを含む感動詞」は指示対象を失い、主に話し手の心的態度を表すコソアである。佐久間 (2002: 187) は後者のような指示機能が曖昧なコソアを次のように提示している。

- (3) 応答詞⁶: ソウ・ソウだ・ソウです・ソウなの…
 あいづち⁷: ソウ・ソウね・ソウなんだ・ソウですね・ソウだよね…
 感動詞: コラ・ソラ・アラ/コレ・ソレ・アレ…
 間投詞⁸: コノ (一)・ソノ (一)・アノ (一) / コー・ソー

⁵指示機能が部分的に失われ、文脈の接続機能が働いている指示複合語とは、「指示詞+助詞」の形として使われるが、まだ一語化していない語類を指す。たとえば、「それが」、「それを」「それに対して」「それにもかかわらず」のようなものである。

⁶応答詞は話し相手が述べていることに対して、賛意、否定、疑問などの意を表すので、ある程度の指示機能を持っていると思われる。単純に「聞いている合図を送る」という相づちとは一線を画している。

⁷メイナード (1987) は「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現 (非言語行動を含む) で、短い表現のうち、話し手が順番をゆづったとみなされる反応を示したものは相づちとはしない。」とあいづちを定義し、聞き手が送る表現としてフィラーと区別している。

⁸これらの間投詞は山根 (2002: 4) で「フィラー」と呼んでいる。他にも声的感動詞、言いよどみ、つなぎの語、遊び言葉、冗長語、間投声、ヘジテーション (hesitation) など様々な名で呼ばれている。その定義について、山根 (2002) は「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係、接続関係、修飾関係にならない、発話の一部を埋める音声現象」とし

応答詞とあいづちは共に「話し相手」の言葉に対する返事に準ずるものである。いわば相手が提出する先行文脈の先行詞や事柄を「指示」する故、談話文脈の性格が強いと言えよう。本稿では、これらを対象外として、掛け声とフィラーだけを「コソアを含む感動詞」と呼ぶことにする。

1.3 コソアの意味拡張に関わる認知言語学の概念

1.3.1 スキーマ、プロトタイプと拡張事例

本稿は指示機能があるコソアをプロトタイプ (prototype) とし、指示機能が曖昧なコソアの関係性を拡張事例 (extension) と見る。その間の関係性は認知言語学の抽象化過程と見る。その中から、共通する抽象概念のスキーマ⁹

(schema) またはスーパースキーマ (superschema) が抽出されることができ、指示機能がなくなっても、相関関係が保持されていると思われる。

プロトタイプはカテゴリーの中の代表例であり、「～とは～のことである」という定義の文型でテストする時に、一番想起しやすい典型である。

拡張事例はプロトタイプと異なる性質を持ち合わせているけれども、それと同じカテゴリーに属すると認識されるのに十分な類似点を備えている事例である。

プロトタイプと拡張事例の共通点を抽出し、概略化して表すものはスキーマであるが、三者の関係性は、図1のネットワークを成している。

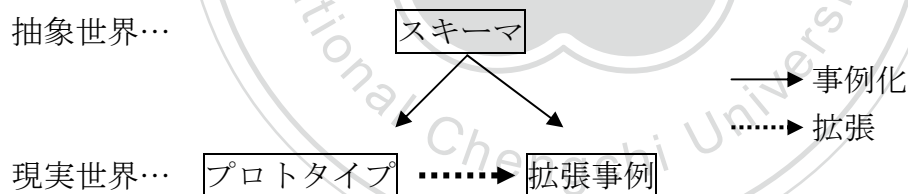


図1：ネットワーク (Langacker1990、吉村 2004)

1.3.2 一方向性仮説

内容語が機能語に変化する文法化は、普通「内容語→機能語」の順序で進んでいる。逆に「機能語→内容語」という順序が少ない¹⁰故、一方向性仮説と呼

ている。

⁹スキーマの定義について、認知言語学キーワード事典では、「同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造を指す。」とされており、いわゆる、カテゴリーの全員に共通して想定される理想像とされる。

¹⁰「機能語→内容語」の変化は、ゼロであるとは言い切れない。文法化とは、カテゴリーを変えるプロセスである故、脱カテゴリー化 (deategorization) とも呼ばれている。それに対して、脱文法化 (degrammaticalization) と呼ばれる現象は少ないにも関わらず存在している。たとえば、「昔男ありけり」の「けり」は現代語では、「けりをつける」のような「最後」の意味

ばれている。Traugott (1989) では、このような一方向性仮説をさらに敷衍して、「叙述的→テキスト的→表現的」というモデルを提出している。たとえば、次のような「hwile (while)」の意味変化がある。

(4) 古代英語 (hwile) = 「時間」【叙述的】

中世英語 (while) = 「間に」テキスト的機能を果たす【テキスト的】

現代英語 (while) = 「けれども」話し手の譲歩の態度を表す【表現的】

結論を先取りすれば、本稿ではコソアが「空間→時間→観念→様態・程度→文の接続機能→感動を表す」という意味拡張のプロセスを持っていると主張したい。それは Traugott (1989)、Hopper & Traugott (1993) で提示された意味拡張における一方向性と合致すると考えられる。

1.3.3 意味拡張

意味変化について、本稿では日野 (2001) に従い、「抽象化」、「抽出化」、「意味の希薄化」の三つに分けることにする。以下は日野 (2001) で言及されている分類を簡単に紹介する。

a. 抽象化 (具体的な意味がなくなり、抽象的な意味が現れる)

日野 (2001) は Heine, Claudi and Hunnemeyer (1991) を参考にして、意味変化の中に、具体から抽象へと変化し、具体的な意味がなくなる代わりに抽象的な意味が現れるプロセスを「抽象化」と名づけている。

(5) 抽象化メカニズムの順位付け



たとえば、「あと」は足跡を指す「もの」から、後ろの「空間」や「時間」を指すこともできる。さらに、消極的な「質」も指している。

空間を表す「まえ」は「前向き」という積極的な「よい質」へ変化することができる。空間を表す「後ろ」も、空間以外に、「後ろ向き」という消極的な「悪い質」に変化している。このような「抽象化」は意味喪失を伴わないのが特徴である。

b. 抽出化 (意味の部分的喪失)

日野 (2001) は元の意味A、BからBのみが抽出される意味変化を抽出化と呼んでいる。抽出化が行われる時、意味の喪失が伴われる。補助動詞の「-あがる」、「-あう」(方向性の抽出)、「-もうす」(敬意の抽出)などは、この類である。たとえば、(6a)の動詞「上がる」が(6b)補助動詞「-上がる」になるとき、「上へ」という方向性だけが抽出されている。

(6) a. 太郎は屋上へ上がった。

を持つ内容語に変化する例もある。

b. 太郎は立ち上がった。(日野 2001 : 45)

c. 意味の希薄化 (意味の喪失)

意味の希薄化の定義について、日野 (2001) は Heine and Reh (1984 : 36) を参考にして、意味の希薄化の過程において、語彙項目は語彙性を欠いた機能を持つようになり、最後に機能だけを持つようになるとしている。

いわば元の意味が失われるプロセスである。具体的に日野 (2001) は以下の二つに分類している。

①指示的→文法的

名詞：うえ、かたわら、きり、なり

動詞：かき-、おし-、ひき- (接頭辞) ; において、について、によって

②指示的→文法的・表現的

名詞：くせに、ものの、ところで、ところが

動詞：てあげる、てくれる、てもらう、てくださる、ていただく

「文法的」とは「文法に関係のある」を意味し、「表現的」とは「話し手を取り巻く環境に対する話し手の態度やスタンス」を意味する。

たとえば、名詞として使われる「うえ」は「ものの上の表面」という意味を持つ故、指示的機能を持っている。しかし、例 (6) のような形式名詞としての「うえ」は既に指示機能がなくなっている。

(7) よく考えたうえ、ご返事します。(日野 2001 : 67)

機能的な見方をすると、三者の違いは、抽象化と抽出化を経たことばは指示的機能を有するが、意味の希薄化を伴うことばは指示的機能 (referential function) がなくなり、その代わりに、文法的 (grammatical) 及び表現的機能 (expressive function) を持つようになる、ということである。

また、語彙によって、三者が重なる場合もある。

本稿ではまず「抽象化」、「抽出化」、「意味の希薄化」の観点で、「指示機能を持つコソア」から「指示機能が曖昧なコソア」への意味変化を論じていきたい。最終的に、「指示機能を持つコソア」から「指示機能が曖昧なコソア」への連続性を明らかにすることを目指す。

1.4 本稿の構成

第二章「指示機能のあるコソア」では、従来のコソアの先行研究の概観を含め、問題点と残された問題を提出する。

第三章「コソアの基本義」では、先行研究の成果を踏まえて、指示機能のあるコソアの基本義 (=スキーマ) を抽出することを目的とする。

第四章「指示詞から接続詞への意味拡張」では、まずコソアの拡張義の一つ、コソアを含む接続詞を見て、その意味拡張の種類や指示詞との連続性を論じて行きたい。

第五章「指示詞から感動詞への意味拡張」では、コソアを含む感動詞が表す機能を指示機能を持つコソアとの連続関係から分析する。

第六章では結論を提出する。本稿で論じたことをまとめ、また今後の課題を提示する。

